



心裏の心理

The impassive youth inside my heart



世界を満たす声

この想いがたとえ百年残ったって
きみの目には一生触れないんだろうな
きみの宝物がぼくにとってのクズであるように
ぼくの想い、なんていうものは
きみにとっての無用の長物以外のなにものでもない

きっとそういうことなんだろう
きみの宝物がたとえ百年残ったって
ぼくはその価値の1パーセントも理解できない
きみが今ぼくの想いを知ったって
それに1ミリも心が動いていない
それと大差のないことさ

きつとこういうことなんだろう
ぼくらはみんな、他人に誇りたいものがあるけど
それはみんな、他人にはまったく理解できないもの
どうにか理解してほしくて
どうにか認識してほしくて

どうにか 他の誰かにも愛してほしくて

ぼくらは声を張り上げるのだから
ぼくらは文字を積み上げるのだから

理解を
認識を
容認を
共感を
賛同を

愛を

求めて叫びあうぼくらの声で
世界は満たされているんだ

bark at you

あとどれだけ大きな声を出せばいいんだろう

どれだけ大きな声だったら君は気づいてくれるんだろう

もう疲れてきたよ

もう声が嘎れてきたよ

もう話す言葉も見つからないよ

どれだけ大きな声だったら君は僕の声を聴いてくれるんだろう

窓ガラスを割るくらい？

建物を崩すくらい？

自分が壊れてしまうくらい？

どれだけ大きな声だったら君は気づいてくれるんだろう

どれだけ心を削って声に乗せたら君は気づいてくれるんだろう

心がなくなるまで？

声が出なくなるまで？

僕が耐えられなくなるまで？

言葉がなくなって

声がなくなって

心がなくなって

そこまでしたら気づいてくれる？

その時にはもう僕は僕じゃないけれど。

ふらりん

これはあなたのものじゃないわ
わたしのものでもないけれど。
これはわたしのものじゃないわ
あなたのものでもないけれど。

ふたりいつもそうやって
宙ぶらりんになっているの
何から何まで嫌なことは
みんな宙ぶらりんになっているの

だいじなことは何もかも
ふらりふらふらふらふらりと
宙に浮かんでゆれてるの
困ったように地面を見つめ
何も言わずにゆれてるの

甘さ

ちがうのよ

砂糖だとか

ハチミツだとか

そんな類の甘さじゃなくて

もっと こう

「もういいや」だなんて

間違っても思わないような

そんな薄くて

でも確実な

閾値ギリギリの

そんな甘さなの

だからもっと欲しいのよ

だから「もういいや」だなんて

間違っても思えないのよ

そう

普通の甘さじゃないのよ

そんじょそこらの詩人なんかじゃ

とても表現しきれないような。

きみの衝動

きみの理由じゃないんだよ
僕がなりたいのはさ
僕はきみの衝動になりたいんだ
「会いたいから」じゃなくて
会わずにはいられない、みたいな
気がついたらふたりで一緒にいた、みたいな
そんな可笑しくて美しくて
ちょっぴり悲しい
きみの衝動になりたいんだ

どうして

どうしてなんだろうね
苦勞してつかんだものより
自分の懐に転がり込んできたものの方が
魅力的に見えるのはさ

苦勞も痛みも
全部覚えているはずなのに
今は薄い膜を一枚隔てたみたいで
なんとも思わない

苦勞も痛みも
こうやって忘れてゆくのかな
いつかこの楽しい時間も
なんとも思わなくなるのかな

どうしてなんだろうね

恋人と友達を分けるのは何？
愛情と友情を分けるのは何？
思いやりと嫌がらせを分けるのは何？
見守ることと無関心を分けるのは何？
あなたと私を分けるのは何？
あの子とあなたを結ぶのは何？

あなたと私の間のライン
超えようとしてもがくたびに
どんどんはっきりしてくるわ

あなたと私の間のライン
瞬く間に私をとらえて
がんじがらめに縛ってゆくわ

見えないけれどやたら存在を主張する
細いけれどやたら頑丈で破れない
そんなラインの向こう側
今日も何事もなく微笑むあなた
そんなラインの向こう側
今日も為す術もなくうなだれる私

悔しい。

吸血鬼（変り種）

ぼくは変り種の吸血鬼
吸うのは血じゃなくきみの愛
他にいい呼び名が見つからないから
吸血鬼って自称してるんだけどね
あ
変り種の

そう
ぼくはきみの愛を吸って生きているんだよ
ねえ
わかるでしょう？

おなかすいた

おなかがすいたよ

きみの愛しか
ぼくの体は受け付けないっていうのになあ

僕はね、

僕はただ君と一緒にいたただけだよ

君はそうじゃないみたいだけど。

「好き」

あなたの言うその意味は
私の言っているその意味とは違うのでしょうか
その重さも
その密度も
その温度も
心の奥に届く速度さえ
違うものなのではないでしょうか

私の言うその意味を
あなたはどのように思っているのでしょうか
どんな重さで
どんな密度で
どんな温度で
どのくらいの速度で
届いているのでしょうか

私の言うこの「好き」に
あなたはいつもゆったりと笑って
「ありがとう」といつてくれるけれど
あなたに届いたこの「好き」は
私の中にあるのと同じではないでしょうか

それとも私のこの「好き」は
あなたの堅い鎧を
貫くことができないのでしょうか
あなたにはこの「好き」が
届いてはいないのでしょうか

届かないとわかっているにもかかわらず
何度でも、声高に
何度でも、囁く
この「好き」を
あなたはわかってくれているのでしょうか？

moonlight serenade (separated)

君が必要なのは僕じゃないなんてことはわかってるけど
僕に必要なのは君じゃないなんてことはわかってるけど

僕の声の届く範囲には君
君の手の届く範囲には僕

それしか望めなかったから
それ以外望んではいけないから

僕でごめん
私でごめん

あの子じゃなくてごめん
あの人じゃなくてごめん

辛いね

重なったため息は僕の悲しみの中心を
重なった呟きは君の悲しみの輪郭を

ふいに 鮮やかにした

ひどい話

現実には 泣いちゃうくらいにシリアスだから
僕は今日も 君にすがっちゃったりするのさ
君はいつも 僕のことだけ考えてくれて
たまにうざったいけれど いないとそれなりに困る
僕はいつも 君のことだけ考えてるわけじゃないけど
君が心を占めて 眠れなくなる事だって

.....これから先 あるかもしれない。

現実には 泣いちゃうくらいにシリアスで
空想は いつも僕のお友達
君は 僕の味方
僕は 君の生きがい
ねえ 僕の涙を拭いてよ
ねえ 僕の代わりに泣いてよ

.....ゴメン 泣いてる女ってうざったいや。

笑ってくれる？

It's all because of you!

伸ばした髪
気合を入れたアイブロウ
フェミニンなスカート
ヒールの高いパンプス
ファンデ
ビューラー
マスカラ
おしろい
チーク
アイシャドー
アイライナー
口紅
グロス
マニキュア
やたら細身なカットソー

みんなあんたのせい
みんなあんたのせい
みんなあんたのせい

pain

この痛みをわからせてやりたくたって
痛みにスタンダードなんかいないわけで

僕のこの身を裂かんばかりの痛みも
君なら耐えられる痛みなのかも

そう思うことではか

僕はこの痛みを耐える方法が見つからないんだ

お互い様

あなたが私に優しくないように
私もあなたに優しくしないようにしてみました。

なによ、その目。

for WHAT?

誰のためにこうしているかだとか
何のためにこうしているかだとか
そんな無粋なことは聞かないで。

僕だって、そんなのわからないんだから。

チクタク

この針が あと何周まわったら
あなたはここから消えてしまうの？
この針は あと何周まわったら
あたしの胸を刺しに来るの？

チクタク

チクタク

チク

チク

チク

チク

変わらないのはこのリズムくらいね

希望について

僕らは希望を忘れたわけじゃなくて
見ないようにしてるだけ
聞かないようにしてるだけ
そうでもしなかったら
僕らはもうとっくに自殺でもしてる

僕らは現実が嫌いなわけじゃなくて
嫌いなふりをしてるだけ
好きだっていうことを隠してるだけ
そうでもしなかったら
僕らは笑うこともできやしない

愛してやまない
希望と現実の間で
僕らはいつも行ったり来たり
どちらかひとつを選ぶなんて
どうにも怖くて

好きだけど届かない

そんな気持ちだけは共通で
ぐらぐら
ふらふら
ただなんとなく
これでいいんだって自分に言い聞かせて生きている

Fly, Baby, Fly

ママ あたしはいつになったらお空を飛べるようになるのかしら？

いつになったら あたしはママみたいに羽が生えてくるの？

羽根が生えたら どんな気分？

空の中にだけいればいいっていうのは きっと気持ちがいいんでしょうね

風の中にだけいればいいっていうのは きっとすばらしいんでしょうね

ママ あたしはいつになったらママみたいになれるのかしら？

いつになったら あの青の向こうに消えてもいいの？

ねえ ママ

教えてよ

hang on

君にあげたものが
君をそうしてしまったのなら
それは本当に、ごめんなさい。

でも

君からもらったものが
僕をこうしてしまったのなら
これは是非とも、責任を取っていただきたい。

心の碎ける音

からから

かさかさ

歩くたびに碎けていきます

かしゃーん

ぱりーん

歩くたびに音をたてています

私の中の私の心

空っぽの胸の中

粉々になって

歩くたびに

乾いた音をたてて

私の中の私の心

空っぽ胸の中

砂になる

歩くたびに

砂丘は砂漠になって

あなたとのことを

砂嵐の中に

消し去ってしまいそう

いつか この時の中に
僕だけが取り残されて
君だけがどんどんきれいになって
君しか知らないことが増えていくんだって
そう思うだけで
僕がここから逃げ出したい理由には
充分すぎるくらいなんだ

今日もまた少しきれいになった君
今日もまた少し君から遠くなった僕

お願いだよ
見せつけないで
そんなに遠くへ行かないで

この胸の痛みばかりがやたらリアルで
嫌になるったらありやしない

悪魔のエレジー

いっそのこと
男になって
君の目の前から
あの子のことを
奪ってしまえば
君が楽になるのかな
なんて思ったりもする

憎しみでもいいよ
君はあたしを見る
呪うようにじっと
一挙一動に気をかけて
復讐するために
あたしのこと
頭はいっぱい
それってまさに
片思いじゃない

恨まれたって結構
憎まれたって結構
狂ってるなんて言わないで
君があたしを見ない
その事実と
その痛みが
あたしをこうするんだから。

local god

僕が君にささげた祈りは
君にどれだけ届いたのだろうか

君が僕に与えた許しは
僕をどれだけ救ったのだろうか

僕に祈ったことは？
僕に救いを求めたことは？

僕は君を許すことができなかったけれど
たぶんそれは君の隙の無さに僕が嫉妬したから

君の抱擁の中をたゆたいながら
僕はいつもすこしだけ怖かったんだ

暖かな底なしの優しさの中
融けてゆく自分を感じていたから

すべてを包み隠すその腕の中
僕の最後のプライドまで隠されてしまいそうだったから

僕を許せなかったことは？
君を許したことが？

今日は君のために祈らせて
僕のために神様になった君に

悲しみアンジー

笑ってみせた

大丈夫だって

強いフリをしてみた

あなたがいなくたって

どうにでもなるって

一人でだって生きていけるって

そんな素振りを見せてみた

最近、あなたの前で口にすることは

みんな、私の私への暗示です。

不機嫌な肌

やっとの思いで手を伸ばして触れたはずの
君の肌はどこか不機嫌で
その肌を温めてあげることは
僕の熱ではムリなんだって悟った

君のしぐさの中に
僕じゃない誰かの匂いを嗅いだ日から
その誰かとずっと争ってきたけれど
君の目はもう僕を映してはいない

不機嫌な君の肌に
どうか最後のくちづけをさせて
そのやわらかなトゲに刺されて
僕はすこしだけ幸せを思い出すから

不機嫌な君の肌に
どうか最後のくちづけをさせて
その冷ややかなトゲに刺されて
僕はすこしだけ未来を描けるはずだから

Don't dream it.

場所だとか

時間だとか

年齢だとか

立場だとか

性別だとか

倫理だとか

体裁だとか

理由だとか

そんなもの全部無視して

むず痒いくらいに

触れてみたくなることって、ない？

クロとシロ

黒よりも黒い僕が
君を押しつぶしてしまうのがわかる
白よりも白い君を

白よりも白い君が
僕を消し去ってしまうのがわかる
黒よりも黒い僕を

この痛みは
君を消してしまうことの痛み？
僕が消えてしまうことの痛み？

ふたりとも消えてしまえるならば
それはまさしく幸福のはずなのに

Bloom

咲く運命だったとか
咲けと言われたからだとか
咲かなければならなかつたとか
咲かざるをえなかつたとか
そういうことじゃないの

私は咲きたいから咲くの
私が咲こうと思ったとき
それが私の咲くとき

けど、散るのを決めるのは私じゃない
私を散らせるものは私じゃない
私を手折って揺らして
丸裸にして
変わることを余儀なくするのは

なんだと思う？

アンブロシア

愛だとか 恋だとか

悲しみだとか 自分だとか

そんなモンに酔えるんだったら

世の中に酒なんてありはしないよ

なあ そうだろう？

Around you

ナツメグの香り
飛び散る光
あなたが笑って
時がうつろう

泡だらけのバスタブ
渦を巻く温度
あなたが淹れた
コーヒーが冷める

アラウンド・ザ・ワールド
流れ出す緑
あなたを想って
時は止まる

色も匂いも実に鮮やか
あなたの周りにはあったものは
全てが実に鮮やかよ

その中心で笑っていたはずのあなただけが
どうしても思い出せないけど。

phantom pain

君の痛みは
そのまま僕を突き刺して
僕の痛みにすりかわる
でも僕は君じゃない
僕は君になれない
君の痛みの核心は
僕の中にはない
でも痛みは確実に
僕の中に
心の中の
何もないところに
ないものが痛むんだから
手当てのしようもない
確実に痛む僕の中の無
なくしてしまったはずのものが痛む感覚
ないはずのものがひっそりと現実をかきわけてくる痛み、だ

まどろむ目の中に
あなたの影を見つけては
せっかくのその姿を
涙でぼかしてしまう
そんな夜ばかりを
すごしていると
あなたの目の中には
私の影なんてすでに
ないのかもしれないと
悲しくなってしまう
ああ
また涙が零れ落ちて。

letters

届けばいいと思うものほど届かなくて
見て欲しくないところばかりが見られてしまう
伝えたい人ほど伝わらなくて
伝えたくない人には伝わってしまう

その手紙は開けないで
あなたのために書いたんじゃないの
その封は切らないで
あなたのために封じ込めたのに

欲しいものほど手に入らなくて
あなたから奪いたいものをなぜか他人が持っている
傍にいたい人ほど捕まえられなくて
捕まえたと思った人は逃げてゆく

その手紙は開けないで
あなたのために書いたんじゃないの
その封は切らないで
あなたのために封じ込めたのに

夢にまで見た風景は
夢のままで消えてゆくわ
つかみたかった幸せを
今日も描いて封をして
あなたに向けて送り出す
そうして心を整理して
わたしは今日をやり過ごす
今にも張り裂けそうなこの心を
そうして空っぽにして
わたしは今日も生きている

接続不可

誰がなんと言ったって

僕はどこにもつながってなんかいないんだよ

違うっていうなら

お前今すぐ俺のために全部捨ててみるよ

男子と言うものは

ばかね 不器用でいいのよ

器用だったら してあげることがなくて困るじゃない

楽しい苦しみ

伝わってない。

届かない。

触れてくれない。

受け取ってくれない。

心が潰される痛みにもだいぶ慣れた

カラダに「心」という臓器がリアルに存在してるみたい

心が満たされる喜びも知ってはいる

それが結構すぐに褪めちゃうっていうことも経験済み

だって人間はないものねだりの生き物だからね

聞いてくれない。

見てくれない。

与えてくれない。

つながってくれない。

カラダに「心」という臓器がリアルに存在するのなら

僕のそれを全摘出してみたい

きっとそれはいやらしいブラウンピンクをしていて

熱く冷たく脈打っているに違いないから

だって人間はないものねだりの生き物だからさ

欲しいものは、一生手に入らないほうがいいんだよ。

お口にチャック。

さびしいときに「さびしいよ」とも言わせてもらえないなんて。

言葉

ああ 違うんだ

イヤ、ホラ、そうじゃなくてさ

そういう意味じゃないんだ

そんな顔しないでくれよ

お願いだから

あーもう

言葉ってヤツはなんで言葉を超えてくれないんだ

なんでただの音波が

こんなに人を喜ばせたり、悲しませたりするんだ

あーもう

言葉ってヤツは

GIFT

好きも嫌いも

望むも望まざるも

あるわけがない

あなたがくれるものは

なんだって

それこそレシート一枚だって

取っておきたい気分

あなたからもらえるものが少ないのは

よく知っているから

すべてを貪欲に

すべてをありがたく

頂戴しなくちゃならない

いつだって必死

あなたがくれるものは

なんだって宝物

好きも嫌いも

望むも望まざるも

決めるのはあなた

感情すらも

あなたからの贈り物だから。

gift (let me try another way)

心をこめてあなたに贈るものは
いつだってかたちのないものばかりです。

あなたからもらいたいと心から思うものは
いつだってかたちのないものばかりです。

かたちのあるものは
目に見えるから安心するけれど
他の人の目にも触れるのが難点です。

かたちのないものは
目に見えないから不安になるけれど
あなたとわたしだけしかわからないでしょう？

わたしが欲しいのは
わたしだからわかるあなた
あなたにあげたいのは
あなたの前だけのわたし

compensation

君と僕の
どちらが正しくて
どちらが間違っていたんだろう

物事なんて
そんなに単純じゃないことくらい
わかっているんだけどね

でも たぶん
僕らがこうなったのって
僕らふたりがふたりして
わからないものをわかったふりをして
単純じゃない物事を
単純にしようとしたからじゃないかな

そう思うよ

今さらだけど

collapse

あの手をつかんだ後に
待ち受けているものは知っていた

この選択が
神様から嫌われていることも

でも 手を伸ばさずにはいられなかったのは
きっと 今日の空がいつもより少し青かったから
きっと その中に君の笑顔を見てしまったから
きっと 君の声がいつもより優しい気がしたから

そんな些細な些細な非日常を
うまい具合に履き違えて
無理矢理自分で背中を押して
瞬きひとつの間に日常を壊して

あの手をつかんだこの手は
壊してしまった日常を直せるのかな

神様はもう一度
僕に選ばせてはくれないのかな

あなたを傷つけないように

そっと

そっと

宝物を扱うように

接してきました

あなたに傷つけられてみて

やっと

やっと

それが間違いだったって

わかりました

あなたが言ったように

女はワガママじゃなきゃダメだわ

惚れた男に

傷のひとつもつけられないようじゃ

傷のひとつもつけられたらば

あなたは私を忘れない

傷のひとつもついていけば

他の女はあなたを見ない

女はワガママじゃなきゃダメだわ

あなた、もしかして

あたしが傷つけられてばかりで黙っていると思ったた？

なあ、なんでこの手は君に触れないんだろう？

waltz for misery

君が/時に/いつか
僕を/想う/だとか
そんな/夢の/ような
そんな/嘘の/ような
時が/来ると/しても
君の/心/すべて
奪う/ことは/できず
気持ち/だけが/逸る
気持ち/だけが/焦る
こんな/恋を/抱く
僕は/闇を/抱く

僕が/時に/いつか
なんの/遠慮/なしに
なんの/邪魔も/なしに
君を/想う/ことが
できる/時が/来ても
君の/心/どこか
遠い/先を/見てる
きっと/見ない/はずさ
こんな/僕の/ことは
ふたり/いつの/時も
気持ち/だけが/遠い

僕は/恋を/捨てる
心/遥か/遠く
触れず/知れず/そっと
僕は/恋を/捨てる

Rabbit, Run

逃げる

逃げる

ウサギは逃げる

あちらこちらへびよこびよこと

愛を探して逃げまわる

ひとりでいるのはさみしくて

ふたりきりでは息苦しい

餌を食うだけ食ったなら

生きるためだと走り出す

抱き上げ愛でよとする手から

ひょいとすり抜け逃げまわる

逃げる

逃げる

ウサギは逃げる

あちらこちらへびよこびよこと

愛に迷って逃げまどう

思想的てろりずむ。

オンナノコはみんなテロリスト
“あのひと”と一緒にいられないんだったら
なにもかも
自分さえ
なくなってしまうと思ってる
これまで地球が滅びなかったのは
そこまでの行動力を持ったコがいなかったから

なんてね

心裏の心理

<http://p.booklog.jp/book/68046>

著者：アママラタスク (@amatasu)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/amatasu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68046>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68046>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ